有棘細胞癌 45

——皮膚転移を伴った有棘細胞癌の1例——

——本多 朋仁* 藤井 義久* 高安 進*——

70歳男性。S. 59, 春, 頭頂部腫瘍に気づくも放置。3ヵ月後腫瘍の増大のため当科受診。初診時所見: 右頭頂部に1.6×1.4 cm 大の表面顆粒状で中央部に潰瘍を形成する境界明瞭な腫瘍が存在, 皮下と癒着, 頸部リンパ節は触知しなかった。Biopsyの結果Squamous cell carcinomaの診断のもとにS. 59. 9. 腫瘍切除術を施行。術中, 骨への浸潤を認めたため頭蓋骨の外板を一部削り, 有茎皮弁にて再建した。

3ヵ月後右耳前部にあずき大の皮下腫瘍を認め3週後拇指頭大にまで増大Biopsyの結果metastatic squamous cell ca. と診断, 局所転移巣の切除術, および, 右頸部リンパ節郭清術を行いD-P皮弁にて再建した後, 化学療法と放射線療法を併用し, 現在経過観察中である。組織学的に, 皮下転移巣にはリンパ節は認められず, 血行性による皮膚転移と考えられる。

* Tomohito HONDA, Yoshihisa FUJII, Susumu TAKAYASU: 大分医科大学皮膚科教室

有棘細胞癌 46

——長期の表皮嚢腫より発症した有棘細胞癌の2例——

——天野 雅弘* 岡崎 直樹* 松中 成浩*——

症例1: 35歳, 女。20歳ころより左大腿中央屈側に拇指頭大の腫瘍に気づくも放置。2~3年来徐々に増大, 暖まると痒みが同部に生じ掻破とともにこれに隣接して腫瘍が出現, 近医で生検しSCCの診断で入院。同部は皮膚に固着して隆起し表面平滑な瓢単型の7.0×5.0×2.5 cmの腫瘍で中枢側は嚢腫状。PM療法1クール後二頭筋を含め広範囲に切除。

症例2: 71歳, 男。昭和51年8月5日初診。

18歳ころから右腰部に座瘡様発疹あり, 増大とともに有痛性となり昭和35年に他医で切除を受けた。2~3年前より同部が隆起し潰瘍化の為来院。4.5×3.0×0.5 cmの肉芽様腫瘍を形成し, 脊柱側に離れて瘻孔あり壊死様物を圧出する。ブレオ投与後切除。切除標本では筋層まで腫瘍細胞の浸潤を認めた。約9年後も再発なし。両症例とも長期持続した表皮嚢腫に発症した有棘細胞癌である。

* Kazuhiro AMANO, Naoki OKAZAKI, Masahiro MATSUNAKA: 和歌山県立医科大学皮膚科学教室